

奄美大島方言のF音について 春日正三

(一)

日本語におけるハ行の子音は、現代共通語音では声門摩擦音のH音であるといわれているが、古くは両唇摩擦音のF音であり、更に古くは両唇破裂音のP音であったろうといふことは、Hoffmann, Chamberlain, 上田万年 金沢庄三郎 伊波普猷 安藤正次氏らの言語学、国語学の学者によって学界の定説となった。

(二)

PからFへ、FからHへと転化したのはいつであったかという国語音韻変遷の時代については、上田万年氏はその著「国語のため第二―P音考―」において、奈良朝以前だとし安藤正次氏はその著「古代国語の研究」において、奈良朝に

その転換が見られるといい、新村出氏はその著「東亜語源志―波行軽唇音沿革考―」において、室町時代の標準的発音はFであり、FからHに遷ったのは主として江戸時代にあったといっている。また橋本進吉博士も、その著「波行子音の変遷について」においては、「語頭における波行子音をFと発音した時代は、平安朝初期まで溯のぼる事が出来る。更に一歩進めて奈良朝における波行子音の発音はどうであったかというに、これを断定すべき資料は殆んど見出されない」と言われながら、「平安初期においてすでに語頭の波行子音がFであり、語中語尾においては奈良朝においてもFと発音せられた形跡があるとすれば、奈良朝においては波行子音は語頭でも語中語尾でもF音であったのではあるまいかと思われる。少なくともPからFへの変遷は、遅くとも奈良朝においてはすでに始まっていたということが出来るであろう。」と

述べている。また「波行子音が最初にP音であった確実な証拠と見るべきものはあまり多くないが、日本語と同系統の言語として疑なく、日本の方言とも見られる琉球諸島の言語において、殊に交通の不便な地において今日なお波行音にPを用いていることと、『ひとびと、いしばし』のいわゆる連濁において、波行子音がB音になること。ヤハリがヤッペリ、アハレがアッパレとなる如く波行子音がPになることもあるのも、波行音がPであった時代の発音の名残と見るべきであろう……中略……語頭のP音が古音を残しているものであるべき事は、琉球の諸方言の比較からも、日本語における波行子音の歴史からも推測せられる」と述べておられる。また有坂秀世氏はその著「音韻論」において「日本語のヒフヘボの頭音は、古くはPであったが、平安時代には既にFに変わって居り、更に江戸時代に入ってはHに変化した」とある。また先に引用した新村出氏の「波行軽唇音沿革考」には「PFの推移が今日なほ判明しないように、FHの推移の時期がいつ起こるかを決定することは容易ではない。PFの推移がかなり長時期にわたると想像される如くFHの推移は甚だ永く継続していたと推定せねばならぬ」と述べている。

(三)

伊波普猷氏は、その著「古琉球—P音考—」において「上古のP音は七世紀(推古時代)以前において次第にF音に移

り、F音は十五、六世紀(室町時代)に至り、H音に移るの傾向を現わし、十六、七世紀(江戸時代の初)に至り、F音は大方H音にかわったという近畿を中心として起こった音韻変化は、漸次伝播して全国に及び、その余波はいつしか南方の琉球にも及んだ。従って南島語のP音のF音に代わったのは、院政時代以後東北よりの侵入者の言葉、すなわちいわゆる『文の言葉』の影響であるように思われると述べている。

(四)

奄美大島方言のP音・F音・H音の分布については、東京大学言語学教授服部四郎博士、国立国語研究所の上村幸雄先生・徳川宗賢先生が「九学会連合奄美大島共同学術調査報告書」として出された「奄美諸島の諸方言」がある。が、私も昭和三十年から同三十五年の間毎年一回ずつ奄美大島の方言調査をして来たので、このF音の分布について報告したいと思ふ。

共通語の「葉」は、喜界島では〔PA〕、本島北部では〔Pa〕〔Fa〕〔Ha〕で、P音を持つのは、交通不便な笠利村だし、F音を持つのは、笠利より便利で、人の往きかきも前者よりははげしい住用村や大和村で、H音を持つのは本島の唯一の市である名瀬である。しかしこの名瀬にはP音は一回も聞かれなかったが、F音もH音よりはいくらか劣勢だが聞かれた。このことから過渡期といえるのかもしれないが、

後述する古仁屋と比較すると、音韻論としては、やはりH音であるといえる。本島南部では全部〔ɸ〕となり、音韻論としてF音である。しかし、本島南部の良港といわれ、港町として栄えた古仁屋においては、F音とH音とが五分五分の勢力で現われる。私の調査した古仁屋で生まれ古仁屋で育ち、古仁屋を一步も離れたことのない人という六十七歳の男の理想に近い話者を探し当て調査した結果は〔ɸ〕でありF音であった。ところが、ここで五十名の発音調査を行なったのであるが、この比率は、F音が二十二名で、H音が二十八名であった。この他に土地の人達（前述の五十名の中には六十歳代

から十歳代にまたがる話者だったし、必ずしも理想的とは言えない話者もいた）の自然会話の録音では、どうもH音が多く現われる。このことからして、F音がH音に移向していく過渡期といえる。徳之島ではH音もあるが、F音が多い。沖永良部島でもH音だったが、最も南の沖繩に近い与論島では〔Pa〕である。与論島の出身者が相当数古仁屋や加計呂麻島で漁師として働いているが、二年三ヶ月も古仁屋で暮らしているにもかかわらず、Hでももちろんなく、Fでもなく、はっきりとしたP音を持っていたのにはいささか驚かされた。話者の中には、三十歳に近い青年も女性も自分でもなんとなくおかしいですねと言いなながらもP音を発音していた。この他の語においても、語によって、地区によってはいくらかの

動揺があり、音声学的事実において、どれを表記すべきかまようことがときどきあったが、その反省的姿においては、やはり、喜界、与論はPであり、本島北部の中心地はHであり南部、徳之島にはF音が音韻論として存在する。

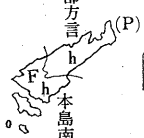
以上のことをおおざっぱに言うと、奄美大島方言の北東に存在する島や、本島の北部にその地理的位置は属しながらもその交通的環境によった辺びな地方、または最南端の与論島方言はP音を持ち、本島北部方言の中心地名瀬はHを持ち、その周辺においてはFであり、本島南部方言、または、徳之島、永良部島方言ではF音であるといえる。

喜界島、与論島はその地理的環境から、伊波氏の言を借りれば、奈良から室町時代にかけて近畿に発生し全国に伝播したその波は、まだ届かないということであり、徳之島、沖永良部島、本島南部方言のF音は、この頃の古い音を留めていることになり、本島北部方言の名瀬においては、その地理的環境から共通語音の侵透が激しく、その現代共通語音に近いH音に変遷してしまった。また本島南部方言におけるFとHのゆれ動きが、その地理的中間位置は、とりもなおさず音韻のうえにも現われて中間の位置を示しながらその過渡的な様相を呈しているといえよう。

紙数の都合上一語でもって代表させた。他に資料として、調査語いを付記する。

喜界島方言

本島北部方言
本島南部方言



徳島方言

沖永良部方言



与論方言

⑤ 韻 本

調査語

1 喜界島	Pana	花	Pana	鼻	Pana	齒	Pa:
2 北部	hana		*Pana	hana	*Pana	Fa:	Pa:
3 南部	Fana		Fana	Hana	Fa:	ha:	
4 徳之島	Fana hana		Fana Hana	Fa:			
5 永良部	Fana hana		Fana hana	Fa:			
6 与論島	Pana		Pana	Pa:			

1	Pidai	Pi:	Puji	Puni
2	hidgari	Piru hiru	Fuji	huui
3	cidgari	giri hiri	Fu: ji	Runi
4	Hizari	Hiri	Fuji	Funi
5	cidzai	Pi:	Fusi	Puni
6	Pidzai	Pi:	Puji	Puni

1	Pu:	帆	吹く	ほこり (換)	Fumu
2	hu:		Fukjuri	Fomo	
3	Fu:		Fukjuri	Fu: mi	
4	Fu:		(たし)	Fu: mu	
5	Fu:		(たし)	FuFumu	
6	Pu: Fu:		Fukjui	qumi	

以上の用例のほかは、「灰」のことを、本島におつては「Fé」(Fé:)、喜界では「Jeni」、与論では「Pai」となる。動詞の「讀べ」は「Fo: ti」の形容詞の「早う」(「大あう」は「Fé: sari」)「Fé: sari」(「Fotesari」)「Foteka」(「Fotesari」)など、共通語の「せむ」の「a」音に代つて「ji: pu」(「せむ」の「B」音に代つて「Fa: pi」)があらつて奥味深し。

「羽」は〔Pani〕〔Pani〕〔Hani〕〔Hani〕〔Pani〕
があり、「臍」は〔Pusu〕〔Pujin〕〔Poso〕〔Hoso〕〔Foso〕
があり、「墓」は〔Paka〕〔Faka〕〔Haka〕がある。
これらの他にまだ相当数の調査語が、特に語中、語尾の P

音と F 音、共通語音の B 音に対する P 音の現われは、興味ある課題である。
なおその分布図（前頁）をきわめておおざっぱに示しておく。

国語教育と外国語教育

志 賀 謙

ごく限られたものを除いては、日本の学生は慨して英語が不得意である。大学生といえ、中学高校時代既に数年間英語にしたしんでおり、それにもかかわらず、英語に弱いという事実は、とりもなおさず、私達英語教育に携わるものが、如何に無能であるかという証左ともいえる。しかし、自分達の無能がひき起した問題を、なにも他に転嫁するつもりは毛頭ないのであるが、この現象は、我が国に於ける国語教育にも

関係しているのではないかと近頃切に感じるようになった。私が、日本の学生は英語に弱いと感じたのは、この数年来特に云々されている、実用英語の点についてはない。この点についていえば、従来からの旧式な英語教授法が依然として踏襲され、またマスプロ教育の様相がはげしくなっている現状に於いては、無理もないことと思われる。しかし、私が指摘したいと思うのは、従来の方法でも充分カバーできる英